

## 茂吉短歌―「田螺と彗星」『赤光』から（二）

大月 和彦

とほき世のかりょうびんがのわたくし児田螺はぬるきみづ恋ひにけり

ためらはず遠天に入れと彗星のしろきひかりに酒たてまつる

標題の「田螺と彗星」は奇妙な組み合わせだ。一首目は、極楽浄土の鳥と田螺との不思議な関係を描いたもの。二首目は地球に近づき世の中の話題になっていたハレー彗星を詠んだもの。二つは内容的に脈絡がなく、詠んだ順に並べたものらしい。この後に「おさな妻」が収載されている。

第一首は、前回の「地獄極楽図」の歌が、阿弥陀経から引用した極楽と地獄の情景を描いていたのに対し、この歌は極楽浄土に棲む鳥を描いている。

「とほき世」は極楽浄土の意。「かりょうびんが（迦陵頻伽）」は、極楽に生息するという想像上の動物で、姿は鴨に似ているが頭部は人面で天女のように美しい。「若空無我常楽我浄」と美しい声で啼くといわれる。田圃の泥に棲む田螺が浄土の美しい鳥の私生児だという奇想天外の発想が面白い。作者の一瞬閃いた空想で、荒唐無稽な情景。田螺は作者の生家近くの山間の田んぼにいて幼年時代から親しい動物だった。春先には田圃の地中に潜んでいるが水がぬるむ晩春のころ、地上に出て薄い泥の幕を冠って転がっている姿がユーモラスである。とぼけた顔、その姿態に現実感がある。迦陵頻伽と田螺の取り合わせに惹きつけられる。

第二首は、天空に現れたほうき星よ、迷うことなくささと宇宙のあなたに消え去ってくださいと祈り、白く尾を引く星に酒を供えて厄払いするさまを詠む。

明治四三年ハレー彗星が地球に接近し、日本でも彗星の長い尾が地球をすっぽりと包み、人類は滅亡する…などの流言蜚語が飛び交っていた。この厄災の前兆を前にして医科大学を卒業したばかりの茂吉は、神仏を頼って酒を供え、幣を手向けて祈祷する。滑稽ではあるが笑い飛ばすことができない不思議な幻想を呼ぶ。

この時のハレー彗星騒ぎに若山牧水が一首残している。

ややしぼしわれの寂しき眸（まみ）に浮き彗星見ゆ青く朝見ゆ